

# 草津市におけるスポーツフェスティバルが 児童の運動有能感にもたらす効果の検討

## The Effects of the Junior Sport Festival in Kusatsu City on Physical Competence of Elementary Students

赤沢 真世・小沢 道紀・大友 智

AKAZAWA Masayo・OZAWA Michinori・OTOMO Satoshi

### I はじめに

近年、児童生徒の運動能力の低下に加え、運動に対する意欲そのものの低下が問題となっている。中央教育審議会答申（2008）では、「運動する子どもとそうでない子どもの二極化」が生じているという現状や、「運動への関心や自ら運動する意欲、各種の運動の楽しさや喜び、その基礎となる運動の技能や知識など、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の育成が十分に図られていない例も見られること」等が、体育科・保健体育科における課題として挙げられている。こうした現状を改善するため、2008（平成20）年改訂小学校学習指導要領（第2章各教科、第9節体育）においては、「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる」ことが目標として重視され、学校現場での実践の方向性を形作っている。

しかしながら、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てるためには、身体的能力を高めることはもちろんのこと、児童生徒の情緒面・心理面において内発的動機づけを高め、かつ運動に対して「自分はできるんだ」と感じる「有能感」を育てていく必要がある。

このような背景において、滋賀県草津市教育委員会では、2011年度より特色ある取り組みが行われている。それは、市内全13校の小学6年生全員を対象としたスポーツ大会「ジュニア・スポーツ・フェスティバル KUSATSU」（以下、JSFと略す）の開催である。JSFは、草津市小学校体育連盟の主管で、10月中旬の1日で行われ、2011年、2012年、2013年と毎年約1200名の児童が参加した。目標としては次の2点が掲げられている（資料1）。

### 資料1 JSFの2つの目標

【目標1】 市内小学校児童が日頃の練習の成果を発揮して記録の向上を目指し、他校の児童と競い合う経験を通して、体力の向上および運動に親しむ資質や能力の育成を図る。

【目標2】 市内小学校児童が、鍛え上げられた技と力の素晴らしさや、スポーツの魅力に触れる中で、様々なスポーツに関心を持ち、進んで運動しようとする態度を育てる。

（「平成23年度ジュニア・スポーツ・フェスティバル KUSATSU（JSF）実施概要」）

このように、スポーツフェスティバルという形によって、児童の運動への取り組みの機会を設定することによって、スポーツの魅力を感じ、より運動に対しての意欲を高めるとともに【目標2】、市内小学校において、体育や運動に関する学校の行事・取り組みを促進させ、児童が記録の向上を目指して練習することによって体力や能力の向上を図ろうとしている【目標1】。

具体的なプログラムとしては、①全員参加の長縄8の字跳び、②学校対抗の4×100mリレー、③立命館大学所属の団体を中心とした多様なスポーツの参観や体験（チア・リーディング、サッカー、アルティメット、陸上競技、ダブルダッチなど）、の3つが軸として設定されている。

なかでも、①長縄8の字跳び、②学校対抗リレーについては、小学校によっては全校の体育的活動の取り組みのなかに位置付けられていたり、朝や休み時間を利用して、継続的に練習を行っていたりするところもある。また、②の学校対抗リレーは各学校の選抜メンバーが出場するが、①の長縄

8の字跳びについては、草津市の各小学校各クラスの全員が参加し、学級ごとにその回数を競う形となるため、児童全員が関わるプログラムである。さらに、JSFが開催され始めた2011年度より、立命館大学スポーツ健康科学部の科目「サービスマーケティング」の受講生が、学びの一環として草津市の各小学校に出向き、朝練習や体育の時間で長縄8の字跳びの活動の指導・支援を行う取り組みも行われている（「長縄オリエンテーション」と称している）。したがって、この①長縄8の字跳びは、JSFにとって極めて重要な位置づけである。

なお、上記のような大学生との直接的なかわりかは、このJSFのもう一つの重要な側面であるといえる。長縄オリエンテーションで各小学校を訪れ指導にあたるだけでなく、学生はJSF当日においても重要な役割を果たしている。それは、各小学校の担当として各ブースを回る役割、各ブースでそれぞれの種目について説明し、児童たちを参加、体験させる役割、そして優れたスポーツパフォーマンスを見せるという役割がある。

そこで、本研究では、こうした複層的な取り組みの集大成としての体育的イベント「ジュニア・スポーツ・フェスティバル（JSF）」に着目し、このイベントが、児童の運動に対する意欲や資質を高める効果をもたらしているのかどうかを明らかにすることを目的とする。その際には、体育科教育で活用されている「運動有能感調査」を用いて、児童の運動に対する「有能感」がJSFに参加することによって変化しているのかどうかを軸として分析する。そして、こうした体育的イベントが児童の運動に対する意欲や資質を高めるためのさらなる工夫について示唆を得たいと考える。

なお、本稿は2012年度のJSFの取り組みに焦点をあてるものであり、用いたデータも全て2012年度のものである。

## II 調査内容

### 1 運動有能感について一本調査における「運動有能感調査」の位置づけ

今回調査に用いた「運動有能感調査」（岡沢ら、1996）は、「身体的有能感のみを運動有能感と捉えた場合、運動能力や技能の低い児童を運動に内

発的に動機づける方法を検討することは困難である」<sup>1)</sup>という観点から作成されたものであり、単元前後における児童の有能感向上の効果などの測定において、広く活用されている調査票である。

ここで岡沢らが定義した「運動有能感」とは、「運動技術に対する自信」である「身体的有能さの認知」だけではなく、「努力すればできるようになる」という自信である「統制感」、「まわりから受け入れられている」という自信である「受容感」の3因子からなっているのが特徴的である。身体的有能さのみならず、運動に対する自信を総合的に捉えた「運動有能感」を児童の内に高めることで、児童の運動に対する内発的動機づけを高めることができる。実際、自らの運動能力や運動技能が低い児童でも、体育授業を通して「統制感」「受容感」が高められることで、運動に対して内発的に動機づけられること（岡沢・三上、1998）<sup>2)</sup>や、児童自身の運動有能感が体育の授業への積極性に大きな影響を与えていること（橋本・川越・谷山、2012）<sup>3)</sup>が示されている。運動する児童とそうでない児童の二極化が指摘される現在、現段階では運動能力や技能が高くない児童においても運動に対する自信や意欲を育てるためには、こうした「統制感」「受容感」をも重視した総合的な「運動有能感」を育てていくことが必要である。

そこで本研究では、この調査をJSF前後で実施・比較することによって、運動に対する児童の自信の向上に変化があるのか、どのような因子・項目で変化が生じたのかを検討する。それにより、JSFが児童の運動に対する意欲を高める影響力を持っていたのかを分析することが可能であると考える。

なお、ここで注目すべき点が一点ある。それは、この「運動有能感調査」にもとづいた研究では、その前後比較を見る場合、比較的時間をかけた1単元<sup>4)</sup>での前後比較が行われている。しかしながら、JSFというたった一日のイベントの前後における、極めて短時間の比較調査を行った研究は管見の限り見当たらない。したがって本研究では、JSFの一日のイベントの前後において変化が生じるのかどうかという点がまず重要である。

## 2 調査概要

### (1) 調査対象

草津市内の小学校全13校6年生。

（なお、前後比較については、1校が前期に実施しなかったため除き、前後のどちらかに回答していない欠席者を除いた。N=1027。）

### (2) 調査時期

JSF前の2012年10月初旬に第一回目の調査を、JSF当日（10月19日）あるいは直後に第二回目の調査を行い、計2回の調査を行った。

### (3) 調査方法

岡沢ら（1996）によって作成された3因子各4項目からなる「運動有能感測定尺度」（表1）にしたがい、各項目について5段階（5：よくあてはまる、4：ややあてはまる、3：どちらともいえない、2：あまりあてはまらない、1：まったくあてはまらない）の尺度を設けた。（各因子を20点満点とし、合計60点満点で集計し、分析。）

なお、この結果については、2013年4月上旬に、各小学校の体育担当教員（研究主任等）に向けて返却、説明を行った。その後、各学校の担当教員より、調査結果について各小学校の取り組みや児童の様子などの点で関連すると思われることを記述式にて回答してもらい、フィードバックを得た。

合わせて、JSFについての好意度（満足度）調査も行った（調査時期：2012年JSF当日および

事後すぐ、調査項目は表2に示されている）<sup>5)</sup>。この調査分析は紙面の都合上別稿に譲るが、本稿の分析においては、この調査項目のうち、長縄8の字跳びの満足度を合わせて検討している。

表2 JSFの好意度調査 調査項目

1 JSFの好意度調査	1	深く心に残ることや、感動することがありましたか。	3段階評価 (はい:3 どちらでもない:2 いいえ:1)
	2	今までできなかったこと（挑戦する、体験する、応援する等）ができるようになりましたか。	
	3	「あっ、わかった!」とか「あっ、そうか」と思ったことがありましたか。	
	4	精一杯、全力をつくして挑戦したり、体験したり、応援することができましたか。	
	5	楽しかったですか。	
	6	自分から進んで運動に挑戦・体験したり、友達を応援することができましたか。	
	7	自分のめあて（挑戦する、体験する、友だちを応援するなど）にむかって取り組みましたか	
	8	友だちと協力して、なかよく取り組みましたか。	
	9	友だちとお互いに教えたり、助けたりしましたか。	
2 各プログラム満足度	1	長縄八の字跳び	3段階評価 (はい:3 どちらでもない:2 いいえ:1)
	2	4×100mリレー	
	3	陸上	
	4	チア・リーディング	
	5	アルティメット	
	6	ラクロス	
	7	サッカー	
	8	ダブルダッチ	
	9	とくに印象に残ったことはありますか?あれば書いてください。	
3 学生	JSF全体について質問します。 大学生のお兄さんやお姉さんをみて、印象深かったことがあれば書いてください。	自由記述	

表1 運動有能感調査における因子・項目一覧

身体的有能さの認知	1	運動能力がすぐれていると思います。
	2	たいていの運動はじょうずにできます。
	8	運動のじょうずな見本として、よく選ばれます。
	10	運動について自信をもっているほうです。
統制感	3	運動をすれば、かならず技術はのびると思います。
	4	努力さえすれば、たいていの運動はじょうずにできると思います。
	11	少しむずかしい運動でも、努力すればできると思います。
	12	できない運動でも、あきらめないで練習すればできるようになります。
受容感	5	運動をしているとき、先生がはげましてくれたり応援してくれます。
	6	運動をしているとき、友だちがはげましてくれたり応援してくれます。
	7	いっしょに運動しようとして誘ってくれる友だちがいます。
	9	いっしょに運動する友だちがいます。

出典：岡沢ら（1996）、p.153より図表化。

## III 草津市全体の特徴と変化について

草津市全体（一校を除く）のJSF実施前後における運動有能感比較の結果は表3のとおりである。また右側に示したものは、岡沢ら（1996）によって示された、発達段階別に見た運動有能感の因子別得点のうち、小学生と中学生のものである。岡沢らによれば、小学生から大学生において、発達段階が上がるにつれて有能感は低下する傾向があり、統計学的には小学生が他の発達段階よりも有意に高い数値を示しているという。とりわけ身体的有能さの認知については、

小学4年生から5年生への段階で顕著な低下が検出されるという<sup>6)</sup>。そこで、今回の調査対象は小学校6年生であることから、岡沢らにおける小学生および中学生の双方の数値を参考値として示している。

### 1 全体の数値の特徴、変化

まず、全体的な数値（運動有能感合計点）についてである。JSF前では、合計点が41.83点であり、岡沢ら（1996）における小学生の平均点には及ばないものの、中学生の平均点を超えるものである。そして注目すべきは、JSF後には42.25点と有意に得点が上昇していることである。

先述のとおり、これまでの運動有能感調査においては、複数時間をかけた一つの単元の中での教師らによる積極的働きかけや指導改善を経て有能感が向上する例で示され、わずか一日の体育的イベントによる変化を明らかにした研究は見られない。つまり、JSFというイベント、あるいはイベント前を含む短時間の期間において、運動有能感が有意に高まっているという結果自体が極めて重要である。JSFの取り組みが、児童の運動に対する自信や意欲を高めたといえる。

### 2 因子ごとにみる特徴

それでは、より詳細に因子や項目に注目して結果を見ていきたい。はじめに、因子1「身体的有能さの認知」についてである。

因子1では、前後の双方とも、岡沢ら（1996）の小学生よりも下回るものの、中学生の数値よりも数値は高い。そして、JSF前は11.41だった数値が11.57に有意に高まっている。とりわけ、項目8の「運動の上手な見本としてよく選ばれます」が有意に高まっている。

ここからは、JSFで取り組まれる長縄やリレーなどの練習・活動のなかで、集団の前でパフォーマンスを見せる機会が増え、教師や仲間から認められる機会が増えたことや、JSFのイベントの際に、各ブースを周り様々なスポーツを体験する際に、パフォーマンスを体験する代表者として選ばれたり、パフォーマンスに対して褒め言葉をかけてもらったりした経験が増えたのだと思われる<sup>7)</sup>。

次に、第2の因子「統制感」について見ていきたい。岡沢ら（1996）との比較からは、草津市の小学6年生は、小学校平均を下回り、JSFの実施前においては、中学校平均よりも下回る状況である数値であったことが特徴点として指摘でき

表3 草津市全体におけるJSF前後の運動有能感（各項目・因子別）得点比較

		今回の結果 (n = 1027)						岡沢 (1996) の結果			
		項目	JSF 前		JSF 後		t	前後比較	小学生	中学生	
			MEAN	(S.D.)	MEAN	(S.D.)			MEAN (S.D.)	MEAN (S.D.)	
運動に対する自信の種類	身体的有能さの認知	1	2.99	(1.05)	3.01	(1.07)	-0.78				
		2	3.26	(1.08)	3.28	(1.08)	-0.85				
		8	2.16	(1.10)	2.24	(1.12)	-2.75	**	↑		
		10	3.00	(1.19)	3.04	(1.22)	-1.15				
	【因子1】 身体的有能さの認知 [合計]		11.41	(3.87)	11.57	(3.96)	-2.13	*	↑	12.10 (4.28)	10.80 (3.68)
	統制感	3	3.85	(1.01)	3.93	(1.03)	-2.50	**	↑		
		4	3.92	(0.98)	3.96	(1.02)	-1.52				
		11	3.79	(1.08)	3.84	(1.11)	-1.65	*	↑		
		12	3.89	(1.06)	3.96	(1.07)	-2.47	**	↑		
	【因子2】 統制感 [合計]		15.45	(3.53)	15.69	(3.78)	-2.78	**	↑	16.17 (3.53)	15.48 (3.30)
	受容感	5	3.40	(1.16)	3.39	(1.14)	0.342				
		6	3.79	(1.09)	3.77	(1.10)	0.58				
7		3.73	(1.20)	3.82	(1.20)	-2.78	**	↑			
9		4.04	(1.17)	4.00	(1.22)	1.16					
【因子3】 受容感 [合計]		14.96	(3.48)	14.98	(3.68)	-0.27			14.78 (3.68)	14.51 (3.08)	
運動有能感 合計点		41.83	(8.89)	42.25	(9.37)	-2.28	*	↑	43.05	40.79	

(\*\* p<0.01, \*p<0.05)

る。しかしながら、JSFの取り組みによって、この統制感の因子においても、実施前が15.45であったのに対して、実施後は15.69を示しており、有意に高まっているといえる。

さらに、この因子においては、因子を構成する4つの項目のうち、「項目3：運動をすれば、かならず技術はのびると思います」、「項目11：少し難しい運動でも、努力すればできると思います」「項目12：できない運動でも、あきらめないで練習すればできるようになります」の3つの項目において有意差が見られる。

この結果は、JSFに向けた長縄やリレーでの児童一人ひとりの努力や練習が、児童自身に肯定的に受け止められていること、あるいは大学生等のパフォーマンスに触れることで、鍛え上げられた技の背景に、運動に対する努力や練習があることが意識されたことが原因でないかと推察する。

最後に、因子3「受容感」について見ていきたい。今回の調査では、JSF前が14.96、JSF後が14.98と、JSF前後において平均点としては上昇しているものの、統計的に有意な差は検出されなかった。しかしながら、岡沢ら（1996）が示した小中学生の平均と比較したところ、数値の低かったJSF前においても、草津市の小学6年生全体の平均は、中学生平均はもちろんのこと、小学生平均をも上回っている。すなわち草津市の小学6年生においては、運動有能感のうち、「みんなに受け入れられている」と感じて自信となる「受容感」がもともと高い傾向であるのが一つの特徴である。さらに項目別に見てみると、「項目7：いっしょに運動しようとする友だちがいます」が有意に高まっている。

これは、草津市全体の特徴として、日々の（体育の）授業実践において、教師と児童の関係、あるいは児童同士の関係づくりが丁寧に行われていること、そしてさらに長縄8の字跳びの練習などのJSFの取り組みにおいて、児童同士の関係がより強まり、一緒に運動を楽しもうとする傾向が高まったからではないかと考えられる。

### 3 草津市全体の特徴と変化のまとめ

以上のように、JSF前後において、「身体的有

能さの認知」「統制感」という運動有能感の二つの因子が有意に高まり、もともと高い数値を示していた「受容感」においても一緒に運動を楽しもうとする傾向が強まっていることが明らかとなった。このことから、当日までの様々な取り組みを含めて、JSFという体育的イベントの実施によって児童の運動に対する意欲や自信が全体として高められたといえる。

## IV 学校ごとにみた運動有能感調査の特徴および変化

草津市全体のJSF前後比較においては、JSFが児童の運動に対する意欲や自信を高められた結果となった。一方で、個別に各学校の調査結果を分析すると、学校によってばらつきがあることも同時に明らかとなった。そこで本章では、JSFの取り組みと児童の運動への意欲・自信の関係を、各学校の特徴と関連づけて検討してみたい。

なお、各学校においては、児童の日常的な様子も異なり、独自の行事や取り組みがある。今回の調査ではそうした日々の様子や取り組みを詳細に把握できていない。そのため、以降の分析による検討は推察レベルであることを予め断っておく必要がある。しかしながら、共通した特徴があれば、次年度以降のJSFの取り組み、各学校での位置付けについて、有益な情報が得られると考える。

### 1 変化における3つのパターン

各小学校の結果をもとに、有意に高まったといえる項目が多い小学校、有意に下がったといえる項目が多い小学校に振り分け、以下の3つのパターンに配置した。

- ① JSF後に有意に高まった項目・因子が多い
- ② 上昇、下降の両方があり、全体として変化あまりなし
- ③ JSF後に有意に下回った項目が多い

全12校（市内13校のうちE小学校はJSF前の調査結果が無いため、除外している）のうち、①～③の内訳や変化は表4のとおりである。A小学校、B小学校等において変化した項目・因子をすべて抽出したものが「項目・因子」欄にある数字である（単数字は項目番号、因子の場合は「因

子1」等と記載。②の「変化あまりなし」のパターンについては、高まったといえる項目・因子は↑で記載し、下がったといえる項目には▼をつけている。

表4からは、まず、「①高まった」「②変化あまりなし」「③下がった」に配置される小学校がそれぞれ6校、3校、3校とあり、高まった小学校が半数を占めるものの、全小学校において高まっているわけではないことがわかる。

しかも興味深いことに、「①高まった」に配置された小学校では、変化が見られた項目・因子は「すべて」有意に高まっている。一方、「③下がった」に配置された小学校では、変化した項目・因子は「すべて」有意に下がっている。

では、有能感の変化のそうした違いはどこからくるのだろうか。その点を探るために、以下では、パターン①とパターン③における特徴的な小学校を個別に検討し、その理由を推察していく。その際には、各小学校の担当教員からのフィードバック（調査結果を返却・説明し、各小学校でのJSFの取り組みや児童の様子などの点から、調査結果に関連すると思われる事柄を自由記述にて回答していただいた内容）も合わせて検討していく。

表4 変化の3つのパターンと変化した項目・因子

①高まった		②変化あまりなし		③下がった	
学校	高まった項目、因子	学校	項目、因子 (下がった▼)	学校	下がった項目、因子
A	3, 7	I	2, ↑ 5 ↑, 因子3 ▼	B	3, 4, 11, 12, 因子2 【全体】
D	2, 4, 11, 因子 2	J	2▼, 8 ↑, 10 ↑ 4 ▼	C	2, 因子1, 6, 【全体】
F	8, 10, 因子1, 7 【全体】	M	1 ▼	H	1, 2, 因子1, 5, 6, 9, 因子3, 【全体】
G	1, 因子1, 3, 4, 11, 12, 因子 2, 【全体】	※E小学校はJSF前の調査結果が無い ため、除外。			
K	8, 因子1, 4, 12, 因子2, 6, 7, 因子3, 【全体】				
L	1, 因子1 4, 因子2, 6, 【全体】				

## 2 高まった項目が多かった小学校 (パターン①) の例

まずパターン①に配置された学校のうち、特徴的なG小学校の結果を見てみたい(表5)。

G小学校は、JSF前においても、運動有能感全体の数値が高い状態であった。とりわけ、因子3においては、岡沢ら(1996)の平均、あるいはそれより高い数値であった草津市平均をも上回り、極めて高い数値であった。

さらに、今回JSFの前後比較において注目すべきは、因子1「身体的有能さの認知」、因子2「統制感」の高まりである。とりわけ因子2「統制感」においては、4つ全ての下位項目において有意差が検出され、数値の上昇も大きい。

実は、パターン①に配置された小学校の共通点が、この因子1, 2の上昇である。とりわけ因子2の変化がポイントになっているように思われる。表4において太字で示した部分が、因子2とその下位項目であるが、パターン①に配置された6小学校のうち、4小学校に上昇が見られている。

では、「統制感」(やればできる自信)の上昇の背景にはどのような取り組みや児童の様子があったのだろうか。ここで、教員からのフィードバック(自由記述)を検討してみたい。パターン①の

表5 高まった項目が多い例 (G小学校、N=128)

		項目	G小学校のJSF前後の比較	
			JSF前の得点	JSF後の得点
			MEAN (S.D.)	MEAN (S.D.)
運動に対する自信の種類	身体的有能さの認知	1	3.02 (1.04)	3.17 (1.04)*
		2	3.28 (1.05)	3.36 (1.08)
		8	2.23 (1.11)	2.39 (1.11)**
		10	3.03 (1.09)	3.23 (1.18)**
		身体的有能さの認知 [合計点]	11.56 (3.84)	12.15 (3.89)**
	統制感	3	3.77 (0.99)	4.09 (0.96)**
		4	3.83 (1.04)	4.14 (0.91)**
		11	3.76 (1.07)	4.03 (1.06)**
		12	3.88 (1.08)	4.20 (0.96)**
		統制感 [合計点]	15.23 (3.72)	16.47 (3.52)**
	受容感	5	3.27 (1.03)	3.34 (1.06)
		6	4.00 (1.10)	4.04 (0.96)
7		3.90 (1.04)	3.98 (1.06)	
	受容感 [合計点]	15.28 (2.77)	15.55 (3.14)	
運動有能感 [合計点]		42.08 (8.40)	44.16 (8.64)**	

(\*\* p<0.01, \*p<0.05)

学校における自由記述をいくつか抜粋したものが資料2である。

資料2 パターン①の学校における教員からのフィードバック

「5月に全校をあげて長縄大会に取り組んでいる。その延長としてJSFは、積み上げの結果がともなうことで、やればできるという自信がもてたと思う。(A)」  
 「JSF実行委員を立ち上げ、8の字跳びのコツを紹介したり、各クラスの練習の音頭とりをさせたりした。休み時間や朝休みを使って自主的に練習をくりかえし、記録も飛躍的に伸び、運動が苦手な子どもも跳べるようになった。(D)」  
 「長縄跳びが苦手な子・跳べない子が多かった事前から、JSFの取り組みを通して出来るようになった子が多かった。(G)」  
 「1学期に長縄フェスティバル（リレー、各学年に応じた長縄跳び）を行い、6年生においては運動会の種目としても、長縄（8の字）、リレーを行った。JSFまで継続的に取り組み、できるようになった子どもたちが多かったと思います。(K)」

各校のフィードバックに共通しているのは、JSFを一日だけのイベントとして位置づけるのではなく、運動会やその他の体育的イベントの新たに設定することを含めて、小学校それぞれのなかで一貫した、目的を持った体育的活動の流れを作り出しているということである。そうした一貫した取り組みを行うことで、身体的有能さを誇る児童だけではなく、運動が苦手な児童や運動に対する意欲が低い児童においても、継続的な取り組みのなかで苦手を克服し、できるようになる経験を積ませることができる。つまり、見通しのある継続的な取り組みを行っていくことで、やればできる自信（統制感：因子2）を軸とし、実際に運動ができるようになる（身体的有能さの認知：因子1）。そして結果として運動に対する自信（運動有能感）を高めていくことができるのではないかと。

やはり、目的・目標を明確にした上で、各学校において継続的な取り組みを位置づけていくことが改めて重要であることが浮き彫りになる。

3 下がった項目が多かった小学校（パターン③）の例

表4においてパターン③に配置された小学校で

は、一方で因子2「統制感」の落ち込みが大きかった例（B小学校）、他方では因子3「受容感」の項目で低下が見られた例（H小学校）というように、パターン③のなかでも各学校によってばらつきが見られている。そこで、B小学校、H小学校を具体的に検討してみたい。

まず、一つ目の例としてB小学校を取り上げる。パターン①と同様に、調査結果を示した（表6）。変化した項目・因子を見れば、B小学校は因子2、および因子2の下位項目すべての項目のみが落ち込みを示している。因子1や3の項目については変化が見られない。実はB小学校は、先ほど見たパターン①の事例と大きく関連しているのではないと思われる。

B小の担当教員からのフィードバックでは、その低下の原因として、「B小は独自に長縄の取り組みをしているが、良い結果が出なかったこと」と考察されている<sup>8)</sup>。たしかに児童の意識として、継続的取り組みの中で高められた自信や意欲が、当日の満足できない結果によって極めて低下することは考えられる。因子1や3の落ち込みが見られず、「やればできる」と思っていたのにうまく結果が出せなかったとして、因子2の低下に集約したことも考えられる<sup>9)</sup>。

表6 下がったといえる項目が多い例その1（B小、N=47）

		項目	B小学校のJSF前後の比較	
			JSF前の得点	JSF後の得点
			MEAN (S.D.)	MEAN (S.D.)
運動に対する自信の種類	身体的有能さの認知	1	2.66 (1.02)	2.66 (0.95)
		2	2.96 (0.87)	2.94 (0.93)
		8	1.83 (0.95)	1.87 (0.96)
		10	2.72 (1.11)	2.53 (1.15)
		身体的有能さの認知 [合計点]	10.17 (3.43)	10.00 (3.43)
	統制感	3	3.98 (1.14)	3.62 (1.12) **
		4	3.89 (1.06)	3.66 (1.08) *
		11	3.66 (1.23)	3.43 (1.09) *
		12	3.74 (1.18)	3.57 (1.01)
		統制感 [合計点]	15.28 (4.25)	14.28 (3.93) **
	受容感	5	2.77 (1.02)	2.81 (1.06)
		6	3.62 (0.94)	3.49 (1.18)
		7	3.49 (1.13)	3.51 (1.11)
		9	3.81 (1.28)	3.79 (1.32)
	受容感 [合計点]	13.68 (3.36)	13.60 (3.79)	
	運動有能感 [合計]	39.13 (8.84)	37.87 (9.47) *	

(\*\* p<0.01, \*p<0.05)

表7 B小学校とG小学校のJSF当日における長縄8の字跳びに対する満足度

長縄満足度 (3段階評価)	B小	G小	
n	86	86	
MEAN	2.72	2.88	*
(S.D)	(0.57)	(0.35)	

(\*\* p<0.01, \*p<0.05)

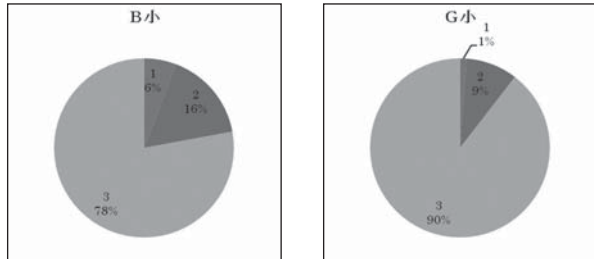


表7に示したのは、JSFについてのアンケート(好意度調査)において、B小学校と有能感の高まりを示したG小学校が当日の長縄の取り組みに対してどのような満足度を示しているのかを比較したものである。平均においては、B小学校よりもG小学校の方が有意に高い数値を示している。満足度の内訳では、B小学校では「3:満足している」ではなく「2:どちらでもない」と回答した児童の割合が多い。このように、児童自身にとっては当日に思っていたよりも記録が伸びなかったことなどがこうした結果に反映されると推察される。

以上のように、各学校における見通しを持った継続的な取り組みは、児童の運動有能感を変化させる大きな影響力を持っているといえる。ただ、それが上記のように運動有能感を逆に低下させる負のベクトルを生み出す可能性もあるということは、留意すべきである。

つぎに、パターン③のもう一つの例(H小学校)を見てみたい(表8)。H小学校では、身体的有能感の認知(因子1)および受容感(因子3)において低下が見られた。とりわけ因子3は、他の小学校のうち、I小学校とH小学校に落ち込みが見られるが、多くの小学校では高まっている項目である。I小学校およびH小学校の特徴から読み取れることはあるだろうか。

この点について、教員からのフィードバックで

の次の記述は、一つの重要な情報を与えてくれる。

「みんなに受け入れられている自信(が低下した原因)は、記録へのこだわりが強くなった結果、苦手な児童への励ましが減ったからだと思います。(I小)」(括弧内筆者補足)

すなわち、とりわけ長縄8の字跳びにおいて、各学校・学級の記録の「競争」に意識が向きすぎることによって、仲間を受け入れる、失敗した仲間を励ます、といった姿が減り、仲間との関係がうまく構築できなくなってしまった、という解釈である。

確かに、はじめに紹介したJSFの【目標1】においては、「日頃の練習の成果を発揮して記録の向上を目指し、他校の児童と競い合う経験を通して…」というように、記録の向上や「競い合う」という面が述べられている。けれども、とりわけ全員参加の8の字跳びの記録向上には、運動の苦手な児童をも励まし参加させることが必要であり、そうして初めて全体としての成果を高めることができる。だからこそ全員参加なのである。この目標1には、そうした思いが込められているはずであり、学生による長縄オリエンテーションにおいても意識されている点である。

しかしながら、因子3の下降や教員のフィード

表8 下がったといえる項目が多い例その2(H小、N=118)

	項目	H小学校のJSF前後の比較	
		JSF前の得点	JSF後の得点
		MEAN (S.D.)	MEAN (S.D.)
運動に対する自信の種類	身体的有能感の認知	1	3.04 (1.21) 2.83 (1.08) **
		2	3.25 (1.20) 3.10 (1.06) **
		8	2.33 (1.24) 2.24 (1.01)
		10	2.96 (1.30) 2.82 (1.14)
	身体的有能感の認知[合計]		11.73 (3.91) 10.99 (3.66) **
	統制感	3	3.77 (1.16) 3.70 (1.04)
		4	3.83 (1.10) 3.78 (1.04)
		11	3.70 (1.19) 3.58 (1.12)
		12	3.86 (1.20) 3.78 (1.16)
	統制感[合計]		15.10 (3.45) 14.85 (4.02)
	受容感	5	3.41 (1.39) 3.28 (1.31) *
		6	3.88 (1.24) 3.74 (1.16) *
7		3.83 (1.31) 3.79 (1.23)	
9		4.12 (1.31) 3.97 (1.30) *	
受容感[合計]		15.31 (3.91) 14.78 (4.14) *	
運動有能感[合計]		42.14 (9.20) 40.62 (9.47) *	

(\*\* p<0.01, \*p<0.05)



バックからは、児童の意識において、記録の向上をめざすことと、運動の苦手な児童も積極的に参加し児童同士の関係を築いていくこととの両立は、そう簡単なことではないことが推察される。

この点からは、とくに運動の苦手な児童に対して、「受容感」を高める指導や活動の在り方について吟味する必要性が明らかとなる。具体的には、教師、そして長縄オリエンテーションや JSF 当日における大学生からの具体的な働きかけはどうあるべきか、あるいは児童同士が受け入れる気持ちを育て、関係構築をしていくことが可能となる活動や場面をどう設定するか（例えば長縄であれば小グループでの活動を増やし、失敗する機会＝周りの児童が励まし受け入れる機会を積極的に作り出すような場面設定）ということである。

以上のように、各学校の分析からは、目的・目標を明確にした上で JSF に向けた取り組みを各学校の取り組みとして位置づけ、継続的な活動・指導を展開していくことが、運動有能感の変化に大きな影響を与えることが見えてきた。また、記録向上へのこだわりが逆に児童同士の関係の構築に負の働きを見せることもある。指導場面や活動においては、受容感を高める働きかけや場面設定の工夫が求められることも明らかとなった。

## V おわりに

本稿では、草津市の「ジュニア・スポーツ・フェスティバル（JSF）」に着目し、児童の運動に対する意欲や資質を高めているかについて、児童の運動有能感の変化を軸として明らかにすること、さらに今後の JSF の取り組みや各学校での指導の在り方に示唆を得ることを目的とした。

その結果、児童全体における運動有能感は全体として有意に高まったという結果となった。一日だけのイベントである JSF の前後において、因子 1「身体的有能さの認知」、因子 2「統制感」が高まり、有能感全体としても高まっていた。「統制感」が高められたこと、そして実際に「身体的有能さの認知」が高められたことは、現状の体育嫌いの児童が増えている状況において、非常に意味のあることだといえる。

さらに、ばらつきの見られた各学校別の分析か

らは、JSF という体育的イベントを各学校の運動会やその他の行事と結び付け、明確で一貫した目的・目標を持ちながら、児童が運動に対する自信や意欲を高められるように効果的に組織していく重要性が明らかとなった。同時に、継続的な活動や指導のなかで、競争や記録の向上ばかりではなく、運動が苦手な児童や意欲の低い児童に対して、「受容感」を高められるような働きかけを積極的に行っていく必要性も導き出された。今後は、JSF を軸として、体育の時間やその他の体育的取り組みが有機的な連関を持ち、児童の運動に対する自信や意欲がさらに高められることを期待したい。

以上の検討を踏まえて、今後の課題として次の点が挙げられる。第一に、各学校における取り組みや児童への働きかけの充実について詳細に検討することが必要である。第二に、今回の結果では、学習意欲を含めた児童の日常的な意欲の実態については掴めていない。JSF というイベントが与えた効果をより正確に掴むためにも、JSF 前後という短い期間の変化だけではなく、長期間の継続的な調査を行い、変化を見ていきたい。

## 謝辞

本研究は、立命館大学社会システム研究所による 2012 年度 BKC 社系研究機構研究所重点研究プログラムの助成を受けました。また、調査および分析に関わり、草津市教育委員会および各小学校のご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

## 【註】

- 1) 岡沢祥訓・北真佐美・諏訪祐一郎「運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究」『スポーツ教育学研究』第 16 巻 2 号、1996 年、pp.145-155。
- 2) すでに「内発的動機づけ」と「運動有能感」との関係には正の相関関係があることが示されている。岡沢祥訓・三上憲孝「体育・スポーツにおける「内発的動機づけ」と「運動有能感」との関係」『体育科教育』第 46 巻第 10 号、1998 年、pp.47-49。
- 3) 橋本健夫・川越明日香・谷山麻香「児童の学習意欲の喚起と授業実践」『長崎大学教育学部紀要：教科教育学』第 52 号、2012 年、pp.11-19。

- 4) 例えば仲井・平野 (2011) では、運動有能感の高揚、パフォーマンスの向上および人間関係の構築を意図してゴール・ゲーム型の単元設計をし、成果を明らかにしている。ここでは一単元として9時間が配当されている。仲井順・平野智之「運動有能感と戦術学習に着目したゴール型ゲーム授業の実践研究」『宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要』第34号、2011年、pp.215-222。
- 5) 高橋健夫・長谷川悦示・刈谷三郎「体育授業の『形成的評価法』作成の試み：子どもの授業評価の構造に着目して」『体育学研究』第39号、1994年、pp.29-37、または長谷川悦示・高橋健夫・浦井孝夫・松本富子「小学校体育授業の形成的評価票及び診断基準作成の試み」『スポーツ教育学研究』第14号第2号、1995年、pp.91-101の調査票にもとづき、JSFの内容に即して文言を変更した。
- 6) 岡沢ら、前掲論文、1996年、pp.150-151。
- 7) JSF終了後、JSFについてのアンケートを合わせて実施したが、そこで「大学生に声をかけてもらえてうれしかった」、チア・リーディングなどで「実際にやらせてもらってほめてもらってうれしかった」という記述も見られた。
- 8) なお当日の記録では、B小学校は学級数の半分が8位入賞に入るという結果であった。結果の比較においては、パターン①に配置された学校・学級が多くの入賞を得て、パターン③に配置された学校・学級がそうではない、という関連は読み取れない。継続的な取り組みのなかでの記録と、当日の記録の差までは情報を得られていないからである。今後の課題として、JSF当日の児童の意識（例えば長縄に対する満足度等）を詳しく調査し、当日の満足度（その理由も含む）と運動有能感の変化の相関も分析したいと考える。
- 9) 他の複数の小学校の教員からも、「当日の記録が思うように伸びなかったため」であるとのフィードバックももらっている。